

2006年度秋学期教育方法学 最終レポート

チーム番号：E 1

0521 - 1025 教育学部教育学科 2回生 新形英晃

レポートのレベル申請 (B)

このレポートが (B) レベルであると判断した理由：

参考文献が2冊以上という形上はAを申請することができますが、参考・引用部分が限られており、全体にわたって利用したとも、自分の意見の裏づけに利用したともいえません。課題として利用を指示された部分の引用とグループのメンバーが提示してくれたものを一部使用したにとどまるのでBと判断しました。

公開同意書

後輩への公開について (a)

Web上の公開について (a)

目次

1 章：チームで構想した学校

すこやか小学校の特色

校区をちいさく

学校の目的

「縦割り」の活動

学校と保護者と地域

学校構想の始まり

2 章：多様な学習者が主体的に学習し、一人ひとりの学力を高めるための具体的な学習

指導方法

現在の子ども

「多様な学習者」について

「多様な学習者の主体的な学び」のメタファーについて

子どもたちの読解力の実態について

学習活動

取り組む学習活動

具体的内容

3 章：学習指導方法の評価と学習者の査定

評価

学習方法の成功判断

考えられる失敗例

学習成果の判断方法

学習成果の確認

4 章：この講義の感想や希望

難解だった一般用語専門用語

時期受講生へのアドバイス

参考・引用文献

1章

チームで構想した学校

すこやか小学校の特色

学校構想の始まり

近年子どもの犯罪の増加がさげばれている。またいじめに関しても、旧来から存在していたものではあるが、悪質化、殺人にまで招く過度化が進行しているように思われる。そのため私たち E1 グループは必ずしも学力に重点を置くのではなく、まず子どもが健やかに育っていくための学校を構想した。

学校の目的

子どもの犯罪の増加やいじめの一因として、一人遊びの増加が挙げられている。一人遊びの増加により、いわゆるゲーム脳化、コミュニケーション不足や人間関係の形成があまりうまく出来ないといった事態を招いている。ゲーム脳による短絡思考化、人の生死に関する認識の低下、人間関係形成不善化で他者に対する関心感覚の低下により他者を傷つける犯罪やいじめが増えていることが言われている。加えて近年のインターネットの普及・進歩が進むことにより、不登校児に対する対処や身体の都合で学校に通うことが困難な児童に対する策等で、インターネットの利用で自宅でも授業が受けられるシステムの登場が考えられる。治安の悪化もあり、自宅で授業を受け学校には登校せず、自宅からあまり外出しない子どもの増加することも十分に考えられるのではないだろうか。このまま一人遊びや、人間関係の形成を出来ないもしくは行わない子どもが増加すれば、ますます子どもの犯罪や悪質ないじめの増加は必至だろう。そのため一人遊びをなくし、子どもが集団の中で多くの人と人間関係を形成し、遊び育っていける学校を目指す。

「縦割り」の活動

そのための取り組みの一つに「縦割り」の活動がある。これは遠足や音楽会、運動会等の学校行事の際に活動班を作り、その班編成は同一学年で編成するのではなく、第1学年から第6学年までの児童すべてをまとめ、各学年が班の中に含まれるというものである。これにより異なる学年間の交流を図り学年関係なく遊ぶことが出来るようになる。

また班にすべての学年の児童が含まれていることから、同一学年での横の関係では生じない上下の関係が形成される。このことで上の学年が下の学年の指標になることを生じさせる。上の学年が下の学年の面倒を見、時に指示を出したり注意したりするといったことは自然に生じるものと思われ、さらにその責任を負うことで児童の社会的な成長も期待できるだろう。下の学年においても上の学年を見て、自分もこうなりたいと思うことや、教師でも親でもない少し上のお兄さんお姉さんといった存在に教えられることで理解できること等があり、ここでも成長があるだろう。上の学年にいじめを否とする教育をおこなうことで、次の学年次の学年へと連鎖していくこともこの関係からは期待できる。

学校と保護者と地域

子どもの一人遊びの増加の原因の一つに、地域治安の悪化により子どもをあまり外で遊ばせたくないという保護者の不安があるのではないだろうか。その不安を解消し、安心して子どもを外で遊ばせられる状況を形成することが子どもの集団遊びには必要である。そのため学校と保護者に加えて地域を含めた三者間の関係を密にすることを目指した取り組みをしていく。学校を開かれた学校にするため、授業は常に参観自由にする。加えて授業参観日として、保護者にまとめて参観に来ていただく機会も多く設ける。同時にその際には保護者懇談会を行い、教師と保護者だけではなく保護者間の関係を密接にして連帯していくことを目指す。地域との連帯に関しては、地域に社会学習に行くことや地域清掃ボランティアや学校主催での地域連帯行事の機会を設ける。地域と共同で何かを行うことで連帯を深めていく。特に子どもと地域の人が共同することで、地域の人に子どもを知らせることになり、子どもも地域の人と知り合いになることで親しみやすい存在になっていくだろう。同時に保護者も参加することによりこの関係は地域と学校、子どもだけではなく保護者と地域の関係にもなる。保護者や地域の人が子どもやその親のことを知っていれば、何かあればすぐに連絡するといったことが可能になる。これらのことを通し学校や保護者、それ以外の人全体の連帯を作り、地域全体で子どもの安全を見守る状態を作り出すことで、すこしでも安心して子どもを外に遊ばせに行ける状況を作ることが出来るだろう。

校区をちいさく

最後に校区設定にも着目する。小さな校区設定にすることは、学校の総児童数を少なくすることにつながる。校区を狭くすることと「縦割り」活動により学校での児童同士がより親密になり、異学年同士の交流をさらに深めることになる。これは地域でも同じことが言え、より密な地域の治安監視の状況を生み、地域間の情報交換が行われやすくなる。校区が狭く学校が近いということは、地域と学校の行き来もしやすくなり、授業参観への参加率の向上や地域のひとが学校へ訪れる機会の増加などにつながることも期待できるだろう。学校に人が集まることが多く行われれば、そこから新たな交流が生まれてくる。同時に学校から地域へという機会も増やすことができ、校外学習の増加もおこりうるだろう。学校がコミュニティ形成の中心のひとつとして機能するのだ。また狭い校区は学校から教師が放課後に地域を巡回することを容易にし、よりよい子ども見守り体制につながるだろう。

このような取り組みを通して子どもを一人遊びから集団遊びへと導き、子どもが健やかに育っていくことができる学校を構想した。

2章

多様な学習者が主体的に学習し、一人ひとりの学力を高めるための具体的な学習指導方法

現在の子ども

「多様な学習者」について

私達の考える多様な学習者とは様々な目的・態度・興味・関心またそれぞれの考えを持って学習する者だ。

学習者が「多様」になった背景について

「学習者が多様になった背景」は次のようなことだ。まず保護者の学校・教師や学習・勉強に対する考え方が多様になってきた。近年では教師に対し当り・はずれの感覚で批評するといったことが示すように、教師に対する批判が保護者の中で多くなされている。学習に対しても「つめこみ教育」といわれた時期の学力、計算力や知識としての学力を

重視する保護者から、生きる力・生活力・個性といったものの学習を重視する保護者、教育に関して全く関心のない保護者まで様々な保護者の考えがある。そのことと通じて学校に対する考え方・期待・求めるものが多様性を増している。このようなことが「学習者が多様になった背景」ではないか。またこのような多様な価値観を認めようとする現代の流れも「多様」になった背景としてある。「多様な学習者」にあわせて学習に様々な選択肢を用い始めたことによって、児童一人ひとりが興味関心のある分野を学習することが可能になったこともある一面では多様さを増す一因ではないかと考えた。

「多様な学習者の主体的な学び」のメタファーについて

私が考える「多様な学習者が主体的に学ぶ」とは『レゴ』(のようなもの)である。

なぜ『レゴ』なのか

その理由は、子ども一人一人が目の前に与えられた数多くのものの中から自らパーツを選び、自由な発想で様々な形を形成していくことができる、と考えるからである。1つの商品が1つの学校とすると、その中にある部品はその学校の中で子どもが得ることのできるものだ。つまりまず商品を選ぶように、どの学校に行くのか選ぶことができる。さらに、学校の中だけではなくそのほかからもパーツを持ってきて組み合わせることもできる。その中で子どもたちは、自分の求めるものを好きなように組み合わせる。それはマニュアル通りにある物を作り上げるのではなく、自由に作ることも可能であるし、学校の示す一定の流れのマニュアルに沿って作ることもできる。作る内容にしても、幅広く平らに作っていくこともできるし、ただ1つを極めるために高くしていくことも可能だ。

またここには同時に「多様」であることの危険性も含まれている。子どもたちに自由にさせすぎる、つまり「多様」を認めようと何でも個性といい認めたときに子どもが作り出すものについてだ。自由に組み立てた場合他者から見て、まとまった形で綺麗に組みあがっている場合もあるが、いびつに見えるものの場合もある。あまりにもてきとうに組み合わせた場合途中で崩れてしまう場合もある。

このような両面の理由から「多様な学習者の主体的な学び」のメタファーを『レゴ』とした。

子どもたちの読解力の実態について

志水宏吉 著の「学力を育てる」(岩波新書)によると、PISA 2003年の学力テストの結果、読解力の日本の平均点は14位であった。これは2000年の前回の学力テストより24ポイントも落ち込んでいる。レベルを6段階に分けた時に一番下のレベル1未満であった子どもはなんと7.4%(前回は2.6%)もいた。以上の結果からここ数年で日本の子どもの読解力は落ちてきていると言える。さらには全体的に読解力が落ちてきているというより、「できない子」の割合が増えてきている(二極化が進んでいる)ということがわかる。といったことが述べられているように日本の子どもの読解力は低下と二極化が生じている。

「読解力」の定義について

読解力とは、西垣 順子 著の『児童期後期における読解力の発達に関する研究』において文字列の中から単語を認識し、その単語間の関係を認識して文を理解する。さらに一度読んだ文を記憶に保持しながら、新しい文に対する読解処理を行い、文と文の関係をとらえる。多くの認知的処理を同時に行わなくてはならないものである。といったように定義されている。

学習活動

取り組む学習活動

私たちのすこやか小学校では、児童の読解力上のために、『まとめてみよう！伝えてみよう！！』という取り組みを行う。この取り組みは、低学年・中学年・高学年の各二学年毎のまとまりで行っていく活動である。この活動は、低学年では絵本、中学年では小説、高学年では新聞記事をまとめて、その内容を他の児童に伝えていく活動である。ここでは高学年について説明を加えていく。

具体的内容

Meaning 学ぶ意味

ただ何かを読んで終わってしまうのではなく、読んだ内容を他者に伝えるというこの活動を通して、他者に伝わる喜びを感じることができる。他者の感想を得ること

で、自分のまとめたものがどれだけ伝わったかを知ることができ、そのことを繰り返すことで、自分の成長がわかる。そして、他者によりよく伝えていこうとするために子ども達は工夫し、学習していく。

Action 学習活動

この活動は班ごとに分かれて毎朝の 15 分間で行う活動である。1 班 6 人程度でたてわり活動を利用した学年混合の班員構成で行う。班で 1 日に 1 人ずつ、自分が興味を持った新聞記事を好きに選び内容をまとめたものを発表する。その発表を聞いた班のメンバーは疑問に思ったことやその発表に対する意見を交換しあう。また聞き手は発表の内容のまとめや、わかりやすかったなどの発表に関する感想を書き、発表者は発表のためにまとめたものを提出する。発表内容についてわからなかったことを聞かれることもあるので、発表者はしっかり内容を理解しなければならない。また聞き手は発表者が何を伝えたいのかを理解していく必要がある。

ここでは様々な事象に関心を待たせることが一番の目的ではないので、初めは自分の関心をもったことを選び、内容を理解していく力を付けることを目指す。しかしずっと同じこと、たとえばスポーツの野球に関することだけを発表し続けることも考えられるので、この活動は 2 年間同じことを行うことを利用して、第 5 学年では自由に、なれることを目的とし、第 6 学年では少し時事問題などテーマをしばって、どのようなことでも内容を理解できる力をつけることを目的とする。

Contents 学習内容

まず必要なことは新聞記事に目を通す習慣付けが必要だ。また興味を持った新聞記事を選び出しそれをまとめる力を身につけていく。的確に内容を理解、要約するだけでなく、その内容に他者が興味を持つように発表する力を身につけることが話し合いを展開していくためには必要である。また、聞き手は発表を聞き、発表者が何を伝えたかったかという理解する力が必要である。さらに発表のどんなところが良いのか、悪いのかなどを見抜く力をつけていく必要がある。

Environment 学習環境

この活動は各教室で行われる。1 つの教室に 5 班程度が入り、班毎に集まり各々の班で活動を進めていく。各班を教師が見て回るため活動時間中、各教室に教師が 1 人ないし 2 人いる。教師は班の活動の様子を見たり支援を行ったりしていく。また班同士が近づきすぎて集中力が途切れないような班の配置をさせる。また騒ぎす

ざたり、集中していなかったりする班があれば注意をする。活動の時間は朝の会後の 15 分間で毎朝行う。これはそれぞれの国語の時間といった教科の時間で行う学習ではなく、また継続的に行う活動として行うため、朝の読書の時間と置き換えて行う。また朝の会后であるのは多少ではあるが遅刻した場合でも活動に参加できるようにするためである。さらに必要な設備として発表のための記事を学校でも探せるように、教室内に毎日の新聞を常設する。このことで家庭ではなかなか記事を探さない児童でも空いた時間に気軽に新聞を手にとって探すことが期待される。また、置く新聞については、一般の新聞だけではなく子ども向けの新聞を置くことで子どもたちがより取り組みやすく、理解しやすくして、活動に取り組む意思を減退させないようにする。

Tool 学習用具

まず筆記用具はもちろん新聞記事が必要だ。これは各家庭の新聞はもちろんのこと、上記でも述べたように各教室にも新聞を常設しておく。発表者用と聞き手のそれぞれのワークシート、またそれらをまとめるポートフォリオ用ファイルを利用して学習していく。

Outcome 学習成果

新聞記事をまとめてくることで、よりの確な要約ができるようになる。また他者に興味を持たそうとすることで、表現力を身につけていく。さらに他者の発表を聞き、話を展開するために興味を持った部分、疑問に思った部分に気づき指摘していく能力も身につく。

3章

学習指導方法の評価と学習者の査定

評価

学習方法の成功判断

森田信義/横山信幸/山元隆春/千々岩弘一（1993年）著の『国語科教育学の基礎』（暎水社）のp24・88では「読書教育の目標は、つまるところ自分の力で読むことを楽しむことのできる読者を育成するところである。これは「自立した読者」の育成をめざすことだと言い換えてもよい。」とある。ここでいう「自立」とは、読書によって自らの内面を耕すことのできる能力を身につけることをいう。したがって、文章から内容を漠然と把握することから、細部の把握、さらにその文章の伝えたいメッセージまで読み取れるようになれば成功だ。最終的には、その内容を読み取るだけでなく、自分の意見を持っていくことが必要だ。またこの学習では他者に伝える活動も含まれているため、いかに他者に伝えていくかも重要である。

すなわち判断としては、子どもたちを見てポイントをつかんで話をまとめるという力の向上、その文章が伝えたいことを理解する力の向上があればまずは成功といえる。また明確に記事の内容を伝えること、聞き手は話の内容を理解し再度まとめることが必要であり、そのそれぞれの力の向上がみられなければならない。さらに活動面で、班での話し合いが活発になされているかどうかということもひとつの判断基準になる。全員が参加しており内容把握ができていることは成功と判断するためには必要な条件である。たとえ会話がなされていたとしても、その内容が本題から大きくそれた雑談や、それぞれがばらばらと言いたいことを言っている状態では成功しているとは言えない。主題提供者は他者にわかるように的確に内容を伝えられているか、また会話は主題に関わることか、そこから派生した内容で会話できているかがもう判断する基準だろう。最終的には記事の中の事件や問題に対して共感や批判などそれぞれの意見を話し合いの中で交換されるようになれば、大きな成功といえるだろう。

考えられる失敗例

まず考えられることは、発表後に班で話し合いが行われず、沈黙が続いたり話しの話題がずれていってしまったりすることがある。また、毎回抽象的な感想で締めくく

られてしまうようになっても失敗である。良かった、わかりやすかった、だけではなく、どこが良かった、悪かった等がいえなければ力が向上しているとはいえない。子どもとたちが話しを理解せず、話し合いが展開されない、実態としてまとめる力の伸びが見えないことが最悪の失敗例である。

学習成果の判断方法

何を調べるか

まず話し合いが活発になされているかどうかを調べる必要がある。また記事をうまく他者にわかるようにまとめられているか、話を理解しているかどうかを調べる必要がある。どんな会話をしているのか、全員が会話に参加しているかも調べる必要がある。会話や発言の得手不得手があるので発言が少ない子どもがいた場合でも、会話を真剣に聞き参加しようとしているかどうかを見て、ただ発言の有無で判断しないという注意が必要だ。また力の向上を確認するためには継続的に調べ、比較判断していく必要があるだろう。

どのように調べるか

話し合いが活発になされているかどうかを調べるには、常に教師が各班を見て周りどのような話し合いが行われているのかを確認する必要がある。発表者は自分のまとめてきた原稿と感想文、聞き手の児童は感想文を終わりの会で提出する。これを教師は見て、新聞記事をまとめられているか、聞き手は話の内容がきちんと理解できているかをチェックしていく。これを毎回行い、ファイルにまとめていくことで、随時比較判断して成長を確認していく。

学習成果の確認

私達の過去の確認方法

過去において他者の評価を基準に確認してきた。テストの点数、順位、偏差値といった数値的なものも大きな確認の基準にしてきた。教師の評価というものも大きく、教師の言葉や助言で成長が確認できたこともあった。

指導を受ける学習者の成果の確認方法

『まとめてみよう！伝えてみよう！！』では、点数で自分の成長を見るのではなく、指導を受ける学習者は主にポートフォリオを通じて学習成果を確認していく。ポート

フォリオには自分のまとめたものや、他の児童の感想、教師の助言など他者の評価がためられていく。これを通して自分の成長、発展を確認することができる。

4章

この講義の感想や希望、難解だった一般用語専門用語、時期受講生へのアドバイス

今回のこの講義はチーム学習というともありメンバーの都合も考慮する必要があり、また今期はそういったチームで学習を行う講義が多く、それらとの関係もあり話し合いをすすめることは大変だった。しかし他のチーム学習とは違い、この講義ではメンバーのそれぞれに、役割を分担し、決定しているため誰が何をするかといったことでごたつくことはなかった。またこの講義ではどのような学習方法を提案するのか、またその評価方法等順序を追って考えることができ、何が必要なことか、どのような工夫をすればいいのか学校単位で考えることができた。読解力というテーマはあり国語科といった感はあるものの、学校の基本理念から考えることができ楽しいおのだった。ただ意見交換をもっとしたかったのだが、他のメンバーからの意見より自が喋ることが多く、そのまま自分の意見でそのまま通ってしまうことも多くあったのが残念であり、喋りすぎたことの反省でした。自分の考えたことの自分で気付けない問題点などもっと聞けると良かったと思いました。

今回学校構想で自分のチームで構想した学校が学力とは余り関係ない方向で考えたのですが、その後読解力がテーマということになったために、その後のレポートとの関係性がほとんどなくなってしまいました。要望として学校構想の時点で学習に関する事で考えるということ伝えてほしいように思いました。

後輩へのアドバイスは、普段のレポートは大切だということです。毎回のレポートを考えまとめておく、また話あいにも積極的に参加しておくことで、最終レポートのときに自分を楽にすることができると思います。また話し合いには時間のめどを考えて真剣に取り組むことです。先生が特に監視しているわけでもなく、だらだらとしてしまうかも知れませんが、そうしてしまうと、講義時間外に集まることが多くなってしまいます。だらだらしているところは講義以外であつまっても集まりが悪かったり、そこでもだらだらしてし

まったりして集まる回数を増やしてしまっている気がしました。他のグループ学習やレポートも多い時期です。なるべく手際よく話を進めることが大切だとおもいます。

最後になりましたが、ありがとうございました。

引用文献

森田信義/横山信幸/山元隆春/千々岩弘一 (1993年)著

『国語科教育学の基礎』 嚙水社

参考文献

西垣 順子 著

『児童期後期における読解力の発達に関する研究』

志水宏吉 著

『学力を育てる』(岩波新書)